



となる地域は昔は、无邪志・胸刺・知々夫と呼ばれる三国に分かれ、无邪志国造は大穂日命（天照皇大神の皇子とも素盞鳴命の第二皇子とも云われ、出雲臣の遠祖と伝える）の子孫「兄多毛比命」胸刺国は兄多毛比命の兄の「伊狭知直」、知々夫国造は「八意思金命」の子孫の「知々夫彦命」が国造本紀に記される国造であったとされておられます。

ちなみに无邪志国は荒川流域の大宮を中心とした国といわれ、胸刺は多摩川中下流、府中を核とした地域。知々夫は現在の秩父の辺とされており、胸刺は読み方が同音に近く、また伊狭知直にかかわる事蹟が残されず、兄多毛比命に

関するもののみであること等から胸刺の存在は疑問と記すものもあるようです。

或は胸刺は無邪志の国が大國であるために分割をされ、伊狭知直が後年になって国造となったといわれ、風土記稿では兄多毛比命は成務の朝、伊狭知直は応神天皇の代に国造を賜ったのではないかと記されています。

ところで兄多毛比命の祖神とされる天下春命についてですが名勝図会の一ノ宮村の案内で兄多毛比命の祖神は天穂日命、知々夫彦命の祖神は八意思金命でその命の子神が天下春命といわれることから、この神を兄多毛比命の祖神とするのは疑問とし、風土記稿の一ノ宮村の項では大宝律令により初めて国の制が定められ前記の三国が統合をされ武蔵国となったときに国造にかかわる事柄が混同されたためではないかと記してあります。

また大國魂神社の「武蔵総社誌上巻一ノ宮、四ノ宮」の項でもこのことについて細述をされ、これによりまずその内容は信をおけないが「旧事天神本紀」という古書に「天下春命は武蔵の秩父の国造の祖」とあったが古書が世に出たとき秩父の字が脱落「武蔵の国造の祖」となり、いわゆる无邪志国造（兄多毛比命）の祖となったの

ではないかと記し、多摩の地の小野神社にこの命が祀られる由緒については定かでないとの記述がみられます。

しかし武蔵国となる前の三国に深くかわる神であることから武蔵国の国府が置かれるこの地に鎮座をされたことも「故なしとせず」とも記され現在は武蔵国の祖神、国の開拓の神として崇敬をされております。前回でふれた愛甲郡に鎮座をする式内社小野神社のご祭神も天下春命と伝えられていると式内社調査報告書にあります。

ちなみに知々夫彦命にかかわる秩父神社のご祭神は同報告書により「意思兼命・知々夫彦命を主祭神とし大國主命・素盞鳴命を配神、昭和の明細帖では八意思兼命・知々夫彦命を主祭神とし外に天之御中主神を配祀すると記しており天下春命についての記述は見当たらないようです。

なお名所図会に記されている配祀をしたとされる倉稲魂命の由来につきましても資料が乏しく六所宮伝記や名所図会の一ノ宮大明神の項の記述によりまずと「六所宮の西南一里多摩川の一ノ宮邑に鎮座をする一ノ宮大明神祠に祀る天下春命をいつの頃に西十丁の小野宮邑に鎮座をする瀬織津比咩命

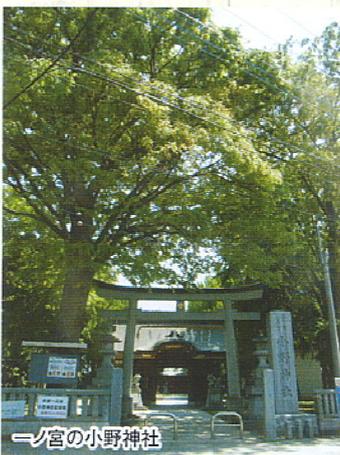
を祀る小野大明神祠へ遷座をし、また倉稲魂命を配祀、ここにおいて始めて小野三神となる」とあり倉稲魂命にふれております。この稲荷の神は地域内に鎮座をしてお社を合祀したのか、地域の安泰、五穀豊稔を祈念するため新しく勧請をした神なのかなどについては定かではありません。ちなみに風土記稿の「六所宮」の案内によりまずと「倉稲魂命はすでに小野神社に配祀されていた神か、他に別に一社として鎮座をしていた神であったのか、またいずれかより遷座をしたのかなどは不詳で定説は見当たらない」との記述がみられます。

これらのことからまずと瀬織津比咩命一神を祀っていた小野宮のお社はこの遷座によって三神となり天下春命は始めて小野宮の社のご祭神に加わったのかと思われまます。とすると兄多毛比命が始めて祖神を祀ったお社は一ノ宮邑のお社となるのか、小野宮の明細書や境内に建つ石碑の碑文にある「兄多毛比命この地に府を建て祖廟を置く云々」と記される関係はどう解釈をするのか、また稲荷の神は明細書や現在の神社関係誌ではこ

祭神になく二神となっている経緯はなにか等々明確を欠くようすがこれを関連づける資料は見当たらず、古社の長い歴史の中に埋もれているようです。

ちなみに管内の鎮守様で天下春命、瀬織津比咩命、倉稲魂命の三神を祀るお社は人見村鎮守の稲荷神社です。これについては資料集の人見の鎮守様の項では、鎌倉時代に武蔵資頼という者が居住、六所宮の拝殿が破損をしたとき幕府の命を受け造営に奉仕、その関係から一ノ宮の小野神社を崇敬し居住の地に三神を祀り守護神社としたとあり参考付記いたします。

ところでこの小野三神は名所図会小野宮の項や六所宮伝記によりまずと「成務の御宇に国造がこの地に府を開いた後に崇敬し再びいつの頃かこの神々を六所宮の相殿に遷し奉り、客来の三神として国社の礼を以って祀られる」とあり



地域の歴史